

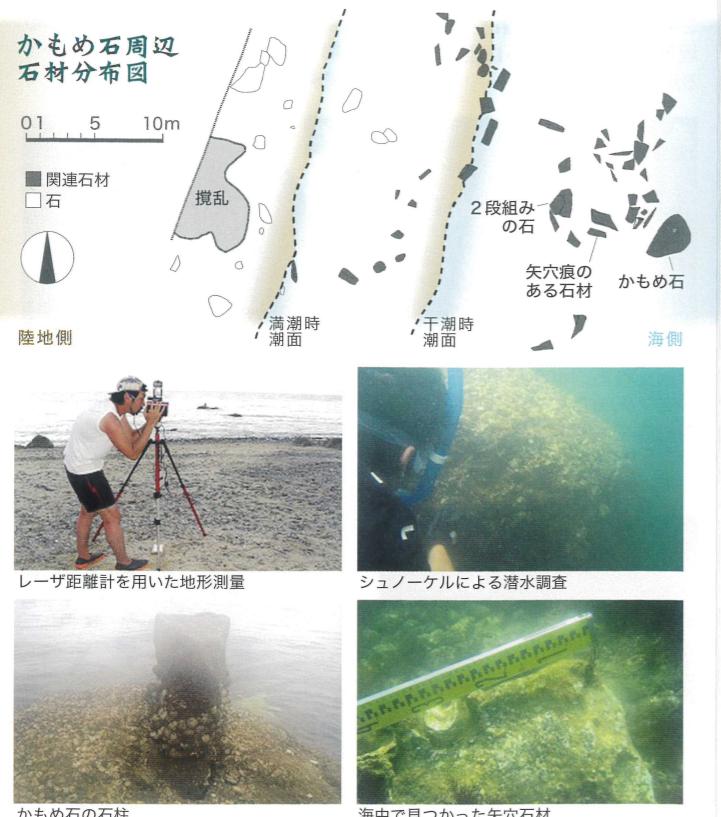


石材運搬の謎を解く水中考古学の実践

徳川大坂城の石垣石は、東六甲や瀬戸内の島々などから切り出され、瀬戸内海を通って大坂の地へ船で運ばれたといわれています。

しかしながら、石材運搬に関しては文献資料や後世の絵図が残されているだけで、その実態は今も謎に包まれています。

小豆島町では、同志社大学文化遺産情報科学研究所との共同プロジェクトにより、石材運搬の具体像を復元するため、平成24年8月から水中遺構調査を開始しています。



アクセス



乗船所要時間

関西方面から	姫路港 → 福田港	1時間40分
	神戸港 → 坂手港	3時間10分
岡山方面から	新岡山港 → 土庄港	1時間10分
	宇野港 → 土庄港	1時間30分 (豊島経由)
	日生港 → 大部港	1時間10分
四国方面から	土庄港 高松港 → 池田港 草壁港	各1時間00分 ※高速艇の場合 30~40分



小豆島町企画財政課 〒761-4388 香川県小豆郡小豆島町池田 2100-4
Tel:(0879) 75-1800 / Fax:(0879) 75-1500
URL: <http://www.town.shodoshima.lg.jp> / E-mail : olive-kikaku@town.shodoshima.lg.jp

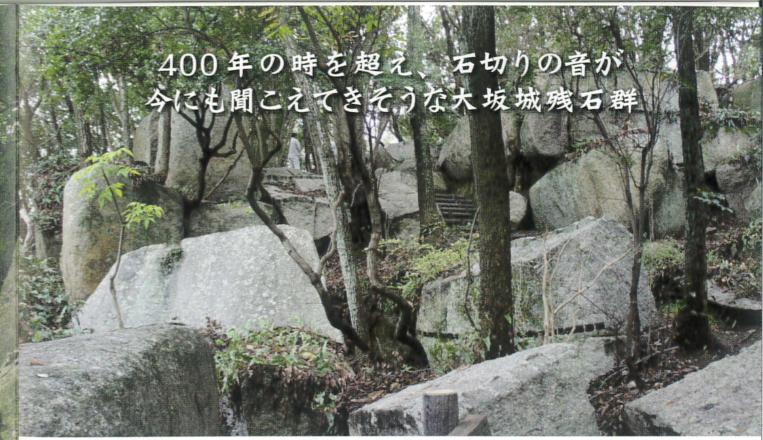


国指定史跡

大坂城石垣石切丁場跡 天狗岩丁場

探訪マップ

小豆島町



大坂城と小豆島の石切丁場の物語

大坂夏の陣において灰塵に帰した大坂城を再築するため、江戸幕府の2代将軍徳川秀忠は、元和5年(1619)に豊臣大坂城をはるかに凌駕する新しい大坂城の築城を63藩、64家の大名に命じました。

築城工事は、元和6年(1620)から3期に分けて行われ、寛永6年(1629)まで、10年の歳月を要しました。

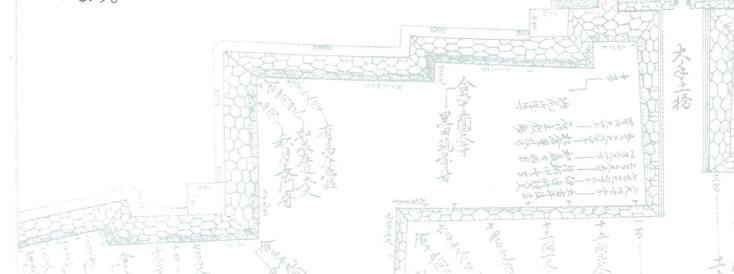
新しく築かれた徳川大坂城の石垣は、総延長12km、高さ32m、使われた石材の総数は100万個を超えるといわれ、世界屈指の巨大石造構造物となっています。

巨大で良質な石材を確保するため、諸大名は、小豆島をはじめとする瀬戸内の島々等に石切丁場を開き、争うようにして大坂の地へ石材を運搬し、石垣を築き上げたといわれています。

この天狗岩丁場は、福岡藩黒田家の初代当主である黒田筑前守長政とその嫡男である忠之が採石した場所であり、岩谷地区に残されている八人石、豆腐石、亀崎、南谷、天狗岩磯の各丁場跡とあわせて、石切丁場としては、唯一の国指定史跡となっています。

丁場跡には、高さ17m、推定重量1,700tを誇る大天狗石をはじめ、巨大な大坂城石垣を連想させる角取石などが累々と重なり、当時の石切技術を生きしく伝える矢穴痕跡や黒田家採石の証となる刻印が随所に見られ、瞼を開じれば石工たちの声や石切りの音が聞こえてきそうな雰囲気が残されています。

黒田家は、大坂城完成後においても丁場の残石を厳しく監視するため、明治に至るまで七兵衛という番人を置き、残石の監護にあらせたことから、天狗岩丁場には666個の残石が存在し、岩谷地区全体では1,600個を超える数を誇っており、その姿は、大坂城築城の歴史と技術を物語っています。



大坂城築城と小豆島

総延長12km、高さ32m、石材数は100万個を超えると推測され、壮大な規模を誇る大坂城の石垣。

戦国大名たちが自らの威信をかけて築造したといわれ、徳川幕府最大級の天下普請（国家プロジェクト）として築城されました。

大坂城の大手口（表玄関）、千貫櫓から北隣にある石垣等が、黒田家によって築かれたと伝えられています。

長さ65間2尺2寸（約120m）にのぼり、大きな石材が必要とされる出角部（石垣の角のところ）に小豆島の巨石が使われました。

黒田家は、第1期工事から第3期工事の全てに参加し、第2期と第3期では、組頭を命じられるなど重要な役割を担いました。

石垣には、小豆島の丁場跡にある黒田家の刻印と同じものが刻まれており、小豆島の石が築城に使われた確かな証となっています。

東内堀から天守閣を見上げたところにある石垣▼



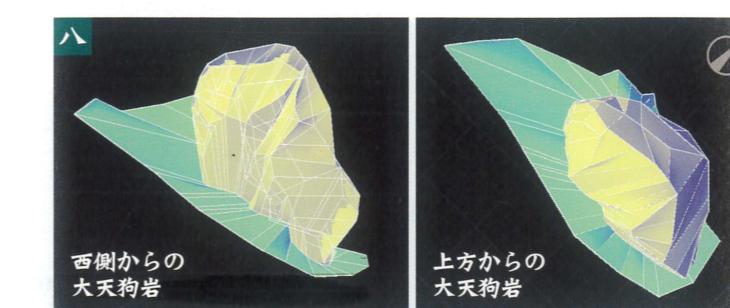
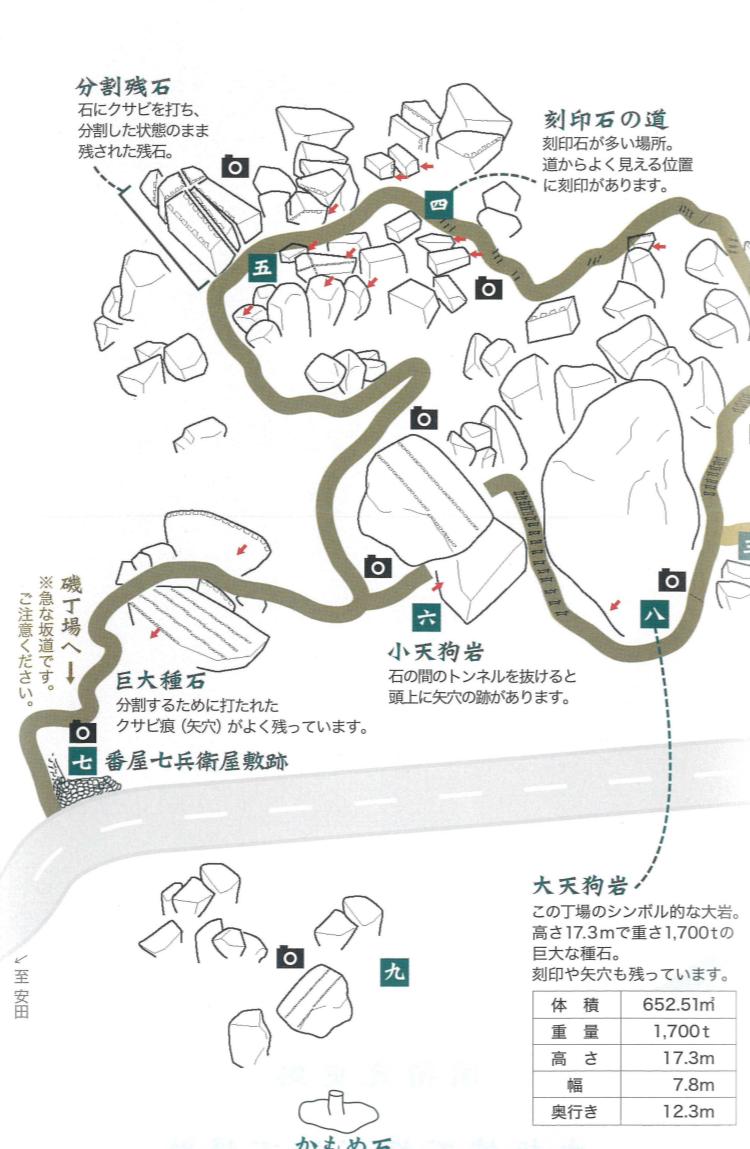
徳川大坂城は、豊臣大坂城を覆い隠すかのごとく、築城されました。これは徳川の世の到来を天下万民に示すため、また、戦国大名たちの経済力を削ぐためともいわれています。

徳川大坂城の石垣は、17世紀における世界最大級の石造文化遺産といわれ、巨大で規格化された大量の石材を必要としたことから、戦国大名たちは、小豆島をはじめとする瀬戸内の島々等に丁場を拓き、石を切り出し、大坂の地へ運びました。

大坂城築城において、瀬戸内海とその島々が極めて重要な役割を担っていたことがうかがわれ、石材の切り出しと運搬の様子は、朝鮮通信使によっても記録されています。



天狗岩丁場 探訪マップ



最新の測量技術により3次元化された大天狗岩



新しい遊歩道を登り始めると最初に見えてくる種石。石を割るために矢穴の跡がはっきりと残されています。時代とともに、矢穴の大きさは小さくなるといわれています。



大天狗岩の下にある猪鹿垣は、猪などから田畠を守るために江戸時代中期に築かれたもので、残石の上に積まれており、歴史の変遷を知ることが出来る極めて貴重な遺産です。



大天狗岩の横にある「そげ石」。石を切ったあとに出来る矢穴痕跡が生きしく残されています。この石から切り採られた石は、大坂城の石垣のどこかに積まれているかもしれません。



刻印石の道では、黒田家の代表刻印とされる○に□の刻印が刻まれた残石を見ることができます。この印こそが400年前、確かにこの地で黒田家が採石した証となっています。



丁場の頂上付近にある真二つに割られた種石。400年前の石切りの技術を知ることが出来る貴重な土木遺産です。ここまで割って、なぜか途中でやめています。



小天狗岩を通り抜けたら、上を見上げてみてください。普通では考えられない方向に向かって矢穴の跡が残されています。矢穴をあけるための下取り線も見られ、石切りの工程が伝わってきます。



天狗岩磯丁場の海岸に残されている残石。ここでも矢穴と刻印がしっかりと刻まれています。

今後の海上遺構調査によって、どのような残石や船積遺構等が姿を現すのか、歴史ロマンへの旅がはじまっています。

